

# 保険分類論の基礎\*

大林 良 一

## は し が き

保険分類論を試みようとする場合には、マ―ネス記念号に載せられたドルン (Dorn, Hanns) の「保険の分類」<sup>(1)</sup>を検討することから始めるのが最も合理的であるかも知れないが、ここでは保険の機能を経済必要の充足とする見地、即ち Bedarfs-theorie の見地から理解して、その見地に立つ学者の分類について、若干の考察を試みようとするものである。

\* 本稿は本年三月十三日西独ハンブルグ大学保険ゼミナールにおいて筆者が試みた講演 “Aufgliederung der Versicherung nach der Bedarfs-theorie” の邦訳である。原文は Zeitschrift für die Gesamte Versicherungswissenschaft, 1964 に掲載された。<sup>1)</sup>

(1) Dorn, H.: Zur Einteilung der Versicherung, in “Festsage für Alfred Manes,” Berlin 1927, S. 1 ff.

保険分類の基礎

一

まず最初に Bedarfs-theorie の始祖 マーネス (Manes, Alfred) の分類を考察しよう。彼は人保險及び財保險の分類標識として經濟必要事故 (Bedarfsfall) を採り上げた。彼は云う、「保險の全領域を二つの大集団に分割するのが合目的であるが、その分割の基準は必要事故が物財の損傷又は喪失に原因を持つか、又は人の傷害若しくは死亡が原因であるか、による基準である。第一の集団を財保險、第二の集団を人保險と呼ぶ」

「この二つの集団は更に一連の異なった保險部門 (Abteilung) を示しておる。即ち財保險はそれが物財の損傷の結果の經濟必要を問題とするか、又はその財産部分の損傷を問題とするかによって物保險及び財産保險の二部門に分れる。人保險では死亡、生存、身体的傷害又は労働力の利用不能の各場合の結果生ずる經濟必要の充足が行われることによって、四つの部門を分けることができる。」

「以上の合計六つの各部門内には更に多数の保險枝分があるが、その区別の基準は經濟必要とは直接の関連はない。この枝分の数は無限であるが、經濟必要と関連のある上述の集団並びに部門の数には拡張可能性はない。」この様にマーネスの經濟必要理論による分類は保險集団及び保險部門の分類に重点をおいているので、ここでの検討の対象も、この集団及び部門の分類でなければならぬ。

マーネスによれば、保險集団の分類標準は必要事故發生の場所であるというけれども、この場合の必要事故は必要發生の原因としての事故を指しておるようである。抽象的な概念としての經濟必要は、その原因である損害事故の發生の場所如何に拘わらず同一であるから、マーネスの保險集団分類標識は經濟必要とは直接的な関連は

ないといわねばならない。例えば或る營業所において火災が発生し、その事業が休止するときは、その事業の期待利益の喪失を意味し、これから或種の經濟必要が発生する。同様に人の死亡、瘵疾、失業のための所得の喪失は或種の經濟必要を発生させる。この経営中断による金銭必要及び瘵疾、死亡、失業等による金銭必要は、それぞれの予想額が等しい限り、同一のもので、何れも金銭によって充足されねばならぬ。

次にマーンズが經濟必要の原因を保險部門分類の標識として採用しているが、この標識は技術的な見地からのものであり、經濟必要理論からは全く意味のないものである。まことにマーンズの分類は形式的用語の上からは經濟必要事故に関係しているが、事実上はむしろ危險技術的な分類となっているのである。

(1) Manes, A: Versicherungswesen, I Bd., 1930, S. 12.

## 二

保險法学者の中ではブルック (Bruck, Ernst) は最も早くから經濟必要理論を採用した学者である。

彼は次の様に論じている。「保險の体系的な分類は經濟必要充足の機能から発生する。この機能は相互に鋭く対立する二つの体系を発生させる。具體的な經濟必要の充足 (konkrete Bedarfsdeckung) の体系により、保險者はその賠償給付を、一定の經濟必要の発生する場合に限って、然も現実に発生させる經濟必要を限度として、その範囲内で、実行する義務を負う。この体系の特徴は保險者の賠償給付が保險金額の作用の範囲内で、現実に発生する經濟必要と関連している点に在る。抽象的な經濟必要の充足 (abstrakte Bedarfsdeckung) の体系によれば、特定の經濟必要と保險者の金銭給付との関係は存しない。保險者は經濟必要が発生したか又事実どの程度

## 保険分類の基礎

に発生したかを顧慮することなしに、保険契約に定められた金額の給付をなす義務を負うのである。そして、この経済必要の具体的充足をその抽象的な充足に対立させることは、若干の保険部門がこれらの体系の何れかによって行われているという事実に適合する、ものである<sup>(2)</sup>。かくしてブルックは物保険と人保険という保険集団の分類に到達し、物保険即ち経済必要の具体的充足をなす保険を損害保険とするのである。

ブルックによれば、なお、「原則的には具体的必要充足は抽象的な必要充足によって代替されない。之に反し抽象的な必要充足は具体的必要充足の体系によって代替されうる」のである<sup>(3)</sup>。

右の論述から見ると、ブルックの保険分類標識は、経済必要の充足が具体的に行われるか抽象的に確保されるか、である。然し彼は「具体的な経済必要の充足」乃至は「抽象的な経済必要の充足」という一見論理的な表現を以て何を意味せしめようとしたのであろうか。精神的又は宗教的な「必要」はたしかに抽象的に充足される。然し経済的必要は常に金銭又は財貨によって具体的に充足されねばならぬ。これは財産の保険のみならず、債務や費用の保険並に人保険の総てに通ずることである。何となれば、保険によって充足される「必要」は常に経済必要であり、金銭的必要 (Geldbedarf) であるからである。若しブルックの具体的必要充足が具体的な損害の賠償を意味するものであるならば、稼得保険 (希望利益保険、経営中断保険などの) の場合には、具体的な充足の代りに、むしろ抽象的な充足といわなければならぬ。

要するにブルックの具体的必要充足は「具体的な損害の場合の経済必要の評価に対しては現実財産の損害という具体的な規準が存在する」、ということを意味するに外ならない。抽象的な必要充足は経済必要の評価に具体的な基準が存在しないので抽象的な評価しかできないことを、意味するものといわねばならぬ。経済必要の評価

においては、その評価基準の区別は経済必要の充足方式に関するもので、そこにこそ分類標準としての意味が存するのである。筆者の信ずるところでは、抽象的な必要充足が具体的な充足で代替されうるといふことは、所謂抽象的な必要充足にも、現実には何等かの具体的な評価基準（治療費、賠償請求等）が存するから代替できるのである。

- (2) Bruck, E.: Das Privatversicherungsrecht, 1930, S. 62/3.
- (3) Bruck, E.: a. a. O., S. 63

## 三

モェラー (Möller, Hans) は、一方で危険状態 (Gefahrenlage) を基として、人保険と非人保険との区別を採用し、他方、経済必要の充足方法を基として、損害保険と定額保険とに分ける。損害保険は具体的な必要充足の原則に基いており、保険者は保険事故発生の後、保険契約者に対し、それにより、発生した財産損害を代償することを要する。定額保険は損害保険と異なつて保険事故発生後に保険契約者に約定の給付をしなくてはならぬ。このような抽象的な経済必要の充足から見て、定額保険には致富禁止 (Bereicherungsverbot) の原則は適用されない。単に保険金額が給付を限定する要因として作用するに過ぎない。<sup>(4)</sup>

モェラー教授が「経済必要の充足方法」と云っている場合、彼はこれによって何を意味させようとするものであろうか。既述のように、保険によって充足される経済必要は常に金銭必要であるから、その充足の方法といえれば、金銭給付か、それに代りうる現物給付、かであらねばならぬ。然しながらモェラー教授の経済必要充足の方

## 保険分類の基礎

法は保険者の給付が損害又は保険金額によって決定されることを意味しているようである。そこに経済必要充足の具体的並びに抽象的方法の区別が存するのである。この具体的及び抽象的な経済必要充足の間の区別は、先に筆者が述べた様に、必要評価の方法に關係するものであり、経済必要の充足に直接關係するものではない。それ故モエラーの場合も必要充足の方法は必要評価の方法として理解すべきである。

- (3) Möller, Hans : *Interesse und Bewertung in Schweizerische Versicherungszeitschrift* 1948, S. 225 ff.; Bruck

-Möller : *Kommentar zum Versicherungsvertragsgesetz*, 8. Aufl. SS. 102/3

- (5) 八二頁

## 四

ハックス (Hax, Karl) によれば人保険・財産保険の区別は保険によって充足さるべき経済必要を引き起す損害が、一方では直接的であるのに対し、他方人保険では単に間接的である、という点に在る。ハックスも又具体的並びに抽象的必要充足の語を用いる。彼は具体的な経済必要充足の意味を、保険により充足されるべき金銭必要が現実的な高さ(量)として決定され且つ充足されると解する。そして抽象的な経済必要充足の意味を、保険事故によって引き起される必要を、客観的な規準がないために、契約締結の際に前以て實際的な損害を決定する目的で、確定しているものと解する。筆者はハックスが「具体的」並びに「抽象的」という表現を用いたのは損害算定のためであって、判然と経済必要の充足を目標としたものではない、と考える。然し損害は経済必要の測定と関連しているので、ハックスの表現はこの点においてのみ経済必要の評価と関連がある。然し彼が「損害

(損失) 決定のための規準 *Massstab für die Bestimmung des Schaden (Verlustes)*」<sup>7)</sup> という言葉を使用したことは経済必要充足の立場からは重要な意義がある。

(6) *Hax, K : Versicherungswesen in Handbuch der Wirtschaft 1959. S. 1380 1383.*

## 五

ギュルトラー (Gürtler, Max) は保険において填補される損害の種類による保険の分類を試みる。彼によれば損害又は損害額は保険事故により発生せる経済必要の高さ (Höhe des Bedarfes) である。<sup>8)</sup> ギュルトラーは経済必要即ち損害を次の三つの種類に分ける。

1 広義の、従って請求権を含めた、財産の破滅、損傷又は喪失を齎らす損害——今日物保険と呼ばれる火災保険、盗難保険、運送保険などは当然にこの中に入るものである。この種の損害に対し財産保険がある。

2 期待される所得又収益の一部的又は全部的な欠除を齎らす損害——稼得者の死亡の場合の寡婦、遺児の生活費の保険、稼得者自身の老齢、痾疾又は傷病の場合の生活費の保険、希望利益保険、経営中断保険等は何れもこれに属し、この種の保険を総括して稼得保険 (Ertragsversicherung) と呼ぶ。

3 財産又は稼得と何等直接の関連のない、従って財産はなく稼得も期待できない者にも発生することのある損害。この種の損害は予測できない異常の支出として或る時点において突発的に又は長短種々の期間中に発生するもので、これらの損害のために費用保険並びに責任保険が用いられる。例えば医療費保険、自動車責任保険等である。<sup>8)</sup>

## 保 險 分 類 の 基 礎

以上の外に、ギュルトラーは定額保険、損害保険の区分に代って、定額保険及び利益保険、(Interessensversicherung)の区分を採用しているが、その区分の基準は賠償(即ち経済必要の充足)の計算方法であって、彼はこの定額及び利益保険を技術的概念と見ている。<sup>9)</sup>

彼が損害概念と経済必要概念との間に区別を設けていないことについては、種々の点で異議があるが、とりわけ保険の場合には、損害は経済必要発生の原因であり前段階であるから、両者を同一視することは論理的な考察の妨害となることを注意しなくてはならぬ。然しながら彼が経済必要発生形態の見地から新しい分類体系を試みたことは共感に値する。彼によれば経済必要の種類はその発生形態によって区分されねばならぬ。物保険の場合の発生形態は人保険の場合とは異なる。ギュルトラーによって稼得保険に加えられた経営中断保険並びに生命保険は経済必要の発生形態の点が特異なものであり、その他の種類の保険と同一の部門に入れることはできない。この二つの保険を稼得保険の中に入れる理由は、この二つの保険が共に将来の稼得——その評価には一見具体的な規準がないが、然し慣習的、理性的な方法で評価されうる稼得——に関連するからである。それ故にギュルトラーの場合は分類の根拠は同時に経済必要測定方法でもあるのである。

(7) Gürtler, M.: Einführung in die Kalkulation der Versicherungsbetriebe. S. 79.

(8) " SS. 77-8.

(9) " S. 80.



マーンズの經濟必要充足説が初めて發表されてから既に六〇年が経過している。この長い年月の間に現実の保險取引は偉大な發展を経験し、新規の經濟必要のために多くの保險部門やその枝分を發生させている。然し保險の分類論はこの實務の發展と同一歩調をとることはできなかった。その理由は主として既に陳腐となっている分類を固守する法律規定が大きな障害となっているからである。分類論が實務と共に進展するためには法律上の規定を乗り越えて、或は法律規定に拘泥せずして、保險によって充足される個々の經濟必要を充分に検討することを要する。經濟必要の種類は保險を利用する個々人の環境によって甚だ区々であり、原則的には総ての種類の經濟必要は保險目的上は必ず評価の可能でなくてはならぬ。經濟必要發生原因の相違に従って、必要評価のために異なった規準を採用しなくてはならぬ。この規準の多様性から保險の分類が發生する。具体的な財産損害の發生を規準として經濟必要を評価する財産保險、将来得らるべき所得又は収益の喪失を規準として評価する稼得保險、医療又は賠償義務に基く現実の支払額を規準として評価する費用保險は、主要な分類をなすといえよう。經濟必要充足説の立場から、保險分類上最も重要な基礎は云うまでもなく經濟必要の測定とその測定基準である。吾々が現実の保險によって充足される經濟必要の目的並びにその測定の意義を知ることが、保險分類の理論に対して、又經濟必要充足説に対しても確実な基盤を持つこととなるであらう。